

## J.Rowntree の社会改良思想

——英国リベラリズムの一様相——

岡村東洋光

### 【1】はじめに

ヴィクトリア時代の英国が、著しい産業発展によって世界を導いたことは周知のことである。だが、その発展のゆえに、社会の諸制度が大きな変化を被ったこともまた、事実である。

最近の研究によれば、16—17世紀に成立したジェントルマンの政治的・文化的支配が、市場経済の発展にうまく適応して、その支配を19—20世紀にまで継続してきたとされる。しかし、利己的で不謹慎な利益動機に導かれた経済活動は、必ずしも人びとに豊かな暮らしをもたらさなかった。支配層は社会構造とひとびとの意識をなんら変える意図を持たないチャリテイでお茶を濁し、結局、旧来の特権を維持しようとしたのである。<sup>(1)</sup>

工業化・都市化の進んだ19世紀になると、ジェントルマンのノーブレス・オブリッジ（特権を保有する人々は、立派に行動すべきであり、特権のない人々を助ける義務を負っているという考え方）の行使とキリスト教精神による教区慈善活動による困窮者への対応策の限界が見えはじめ、逆にそれらの綻びを補完するかたちで、数多くの新興中産階級の人びとによる慈善活動が登場してくる。<sup>(2)</sup>

その背景には次のような事情があったものと考えられる。いわゆる産業革

命によって新しい工場が建てられた地域の多くは、湿地帯などで、耕作や牧畜には適さない場合がおおく、もともと旧来の支配層が眼を向けない、したがって彼らの支配がおよばない、見放された土地——上下水道、警察組織、教育施設などの不在——であることが多かった。だから新興の中産階級がこれらの土地に工場を建て、経営に乗り出す際には、なんらかの公共的な対応策が求められたのであった。もちろん、彼らの中には自分の利益しか考えず、子どもや女性を、深夜労働を含む長時間労働で酷使した者も多数いた。だが、工場法などの社会的な立法による強制があったにせよ、工場主である彼らが地域社会への責任を果たすこと、少なくとも彼らの従業員への配慮を行使するという社会的要請を免れることはできなかった。彼らも出発時においては、旧支配層の農民への対応と同様、従業員に対して家父長的態度、いわゆる家族に対するような『世話と親切な配慮』で接した。しかし、やがて彼らは企業規模が大きくなるに連れ、雇用主と被雇用者、資本家と労働者として、互いに「権利」を意識して行動するようになる。<sup>(3)</sup>

貧民対策の歴史でいえば、1834年の新救貧法 (the Poor Law Amendment Act) は貧者にできるだけ自立を促し、最貧層のみをワークハウスに収容して劣悪な条件の下、酷しい訓練をおこなうという不評な仕組みであった。その後、1869年に COS (the Charity Organization Society) が形成された。それは貧民への無差別な施しは受益者をますます貧しくするし、複数のチャリティは、貧民をしてフィランソロピックな活動に対する偽りの要求を繰り返させることになる、という前提をもって発足した。したがってこの時代の「慈善」活動の基本的性格は、各人の自立を促すものであった、といえる。<sup>(4)</sup>

同じ「自立」を促すといっても、少数ではあれ、進歩的企業家の中には、「慈善」活動を超えて「社会改良」活動へと進む者もいた。社会改良は、一方では「福祉国家」へと収斂していったが、他方では、自発的活動を重視し、あくまでエスタブリッシュメント批判を貫く者もいた。その代表的な人物の一人が、ここで取り上げる Joseph Rowntree (1836-1925) である。

彼は、開明的で革新的な企業家として大きな成功を収め、晩年巨富を手にした。ヒューマニタリアンであった彼は、科学的調査によって大英帝国繁栄の時代にも貧困問題が未解決であるという事実を呈示し、「貧困問題」の解決

のために社会改良の必要性を唱えるとともに実践し、三つのトラスト（ボランティア組織）を創設し、英国社会の様相を変えようと試みた。また、クェイカーの信仰に忠実であった彼にとっては、——クェイカーは歴史的に審査法や地方自治体法によって社会的な差別を受けてきた——貴族院と国教会は差別の象徴であり、常に批判の対象であった。<sup>(5)</sup>

彼の思想と活動は、古典的自由主義が行きづまり、新自由主義へと変貌をとげる時代にあったが、社会の制度設計に関して支配的な流れとはいささか異なる代替案を示している。後に詳しく見るが、それは平和主義を踏まえ、地域社会に根をおいて、各人の自立的な活動と潜在的な能力の開花、および相互協力を導くような社会のあり方を目指すものであった。<sup>(6)</sup>

## 【2】若きラウントリーの思想的基盤

ラウントリーの人物像を描くために、若きラウントリーに影響を与えた二つの要素——クェイカー主義とヒューマニタリアニズム——について予め一瞥しておこう。

現近では the Religious Society of Friends と呼ばれるクェイカーは、George Fox (1625-1691) が創始者で、17世紀に起源をもつ。フォックスは当時の国教会のあり方に疑問を抱き、異なる考え方にたどり着いた。その結果、クロムウェルのピューリタンからも、チャールズ2世の復古王朝からも迫害を受けることとなった。<sup>(7)</sup>

フォックスは新しいセクトを作るのではなく、十二使徒の時代に帰ることを願い、イエスは聖霊として再来すると考えた。ペテロの教えを追究する中で、彼は人種、性、階級を理由にして人々を抑圧することのない、ラジカルで、平等主義で、聖霊に満たされたキリスト教を求めた。彼は、初期教会のメッセージが、教会が制度化されたことで失われ、いまや十二使徒たちが置かれていたのと同じ状況に立たされていると主張し、神父や主教の位階的に構成された権威に反対し、ローマ・カトリックと英国国教会の信仰に挑戦した。

フォックスは、次のように主張した。誰でもが神父や聖職者の介在なしで

生きたイエスと個人的な関係を持つことができるし、イエスのみが各人の条件に語りかけることができる。聖書の言葉は、神の最終的な啓示としてみなされるべきではなく、それは汝の心の中に聖霊が語りかけるのを聴くのと同じように、聖霊が宿るものとして読まれるべきである。読者に聖霊が宿るとき、彼らは神聖な旅をすることができる。われわれは皆、神の子として、神からこの力や光を与えられている。静謐に待っていれば、神が心の中に話しかけてくる。われわれは、皆、神の子として平等である。神の目線からは、誰も他の人より上に来ることはない。

したがってクエイカーの実践は、簡潔な生活、簡素な衣服、端的な言葉としてあらわれる。クエイカーの最も重要なメッセージの一つは、宗教、ないし信仰は経験的なものであり、各人にとっての経験的な神を巡る事柄である。神がいつもあるということは、各人の生活全体が神聖なものだということである。だから、彼らはいつも内なる旅と外なる旅とを結びつける意義を強調する。外なしに内に向かうことは、利己的に導くし、内なしに外に旅することは「燃え尽きること」に導く。内および外への旅は、神の法「神を愛し、汝と同じように隣人を愛せよ」の実践的な適用である。クエイカーにとってこの本質的な教義は今日でも変わっていない。

その後クエイカーは静寂主義をへて福音主義の影響を受けるようになる。ラウントリーの兄ジョン John Stephenson Rowntree (1834-1907) が書いた『クエイカー主義——過去と現在』(1859)での三つの提言はラウントリーの父親の意見でもあった。同年のロンドン年会では、非友会徒との結婚をすることによるクエイカーからの破門の廃止、次年度は言葉使いと服装の自由化が決められた。やがて19世紀末には、自由主義神学が支配的になる。ラウントリーの長男 John Wilhelm (1868-1905) はその代表的指導者であった。<sup>(8)</sup>

このように支配的潮流の変化はあったものの、ラウントリーの時代は、総じて教会業務を実業家たちが無給で担っていた。父親もその一人であった。ラウントリーは幼い頃から同じクエイカーであった両親から、知らずしらずの間に、簡素でありながらも、他人のために協力奉仕するという生き方を学んだ。また、自宅はしばしばヨークにおける季会 (Quarterly Meeting) の際の宿泊所と化したので、多くのクエイカーが訪ねてきた。その中に政治家で、

奴隷解放運動でも知られていた John Bright (1811-89) や Samuel Tuke (1784-1857) がいた。彼はこのような人物からも、影響を受けたことはまちがいない。

こうして信仰厚きフレンドたちは、奴隷貿易反対運動、禁酒運動、監獄、学校や精神病院の改革、雇用条件の改良、避難民などの支援、提案された立法の影響の検証といったような、先駆的な社会活動を導いた。絶対的平和主義と誠実であることへの献身もまた、彼らの特徴である。こうして彼らの活動はその時代において社会の進むべき方向を示すものであり、彼らはいわゆるポリシー・メイカーでもあった。ラウントリーの思想と活動は、まさにこれを地でいったものであった。

次に、人は、しばしば若い頃に遭遇した出来事によって生き方を方向づけられることがある。ラウントリーの場合、それはジャガイモ飢饉の渦中の、三週間にわたるアイルランド訪問であった。1845-49年アイルランドで大飢饉が生じ、ラウントリーが14歳の時、父親は小学校の校長とともに、兄弟を連れて調査に出かけた。道端で既に餓死したと思われる子供を抱きかかえ物乞いする母親や、泥炭を売りにいく途中で力尽きて無くなった男の死体を見て、ラウントリーは衝撃を受けた。このときの経験は、生涯を通して彼の思考と生き方に影響を与え、彼の人道的な活動、とりわけ貧困問題への関心の出発点となったことは疑いない。<sup>(9)</sup>

もうひとつ個人的な事件をあげるとしたら、1862年8月に結婚した Julia Seeborn が1863年9月に突然病死したことであろう。彼女の死後、ラウントリーは貧困に関する資料を集め始めた。飢餓と貧困の根本原因を探究することに専念した彼は、『国富のあまりの多くが軍備に費やされ、そして滑稽なほど少額が教育に費やされていたこと』<sup>(10)</sup>を発見した。また、彼は過去12年間の、イングランドにおける生活保護者数や婚姻登録から文字をかけない人の数を推定し、さらに1805年から1860年までの犯罪統計を作った。彼の考えでは、貧困・文盲・犯罪は相互に容易なむすびつきをもっていた。貿易・国民消費・人口を調査したのち、彼は税関と間接税務局の数字を使い、次のような階級分析をおこなった。100万人の Upper and Wealthy, 900万人の Merchant's Clerks, Shopkeepers, etc. 1,800万人の Mechanics and Operatives,

100万人の Poor.<sup>(11)</sup>

この数字に追加して彼は『ブリティッシュ文明。そこに含まれるものと含まれないもの』というエッセーを書いた。それは J.S.Fry (1766-1825) が同業者への攻撃を引き起こしはしないかと心配するほどのものであった。

ついでラウントリーは『イングランドとウエールズの赤貧』なるエッセーを書いたが、こちらの方がもっと過激であった。いわく、保健省の医者は、最近、細心の調査の後に、わが国の人口の5分の1が十分な食物と衣服をもっていない、と宣言した。自然の富に恵まれ、前例のない程の富をえたこの国で、百万の住民が生存をかけて闘いの日をすごしているということは奇怪な出来事である、と断じた。

ラウントリーによれば、こうした事柄の責任は、エスタブリッシュメント(国教会と国家)にあった。元来彼らは人々の幸福を望んでいたはずである。しかし、今日では、組織されたキリスト教徒の生活の半分は国家とむすびついており、ジャマイカの大虐殺、中国の阿片戦争、黒人奴隷問題には口をつむぐが、彼らの利益や支配が危機に陥るときには、発言力をとりもどし、容赦なくアイルランド市民を逮捕する。また、彼はチャリティの偽善を告発する。『基金チャリティ、感情にかられたチャリティ、正義の行使としてなされるチャリティのような通常なされるチャリティは、それらが救済する多くの不幸をうみだすが、それが創りだす不幸のすべてを救済するのではない。』と。<sup>(12)</sup>

以上、クェイカー主義とヒューマニタリアニズムという二つの要素が、若きラウントリーの思想形成にとって基本的、かつ本質的な影響を与え、そして1890年代以降のラウントリーの社会活動をもたらした、といえよう。<sup>(13)</sup>

### 【3】企業内福利と社会貢献，そして社会改良へ

ラウントリー一族の中では、貧困調査を行った Benjamin Seebohm(1871-1954)がよく知られている。しかし、この調査については、父親ラウントリーが息子シーボームに勧めたものであった。二人の関係を一般的にいうと、様々な社会貢献・改良活動のアイデアを示し、かつ組織を創設し、活動したのが

父親ラウントリーで、その延長線上に、さらなる活動を展開していったのが息子シーボームであった、と概括できる。したがって思想や活動の独創性という点では、父親ジョーゼフの方にもっと大きな関心がよせられるべきである。<sup>(14)</sup>

彼は産業革命が人間よりも機械を選び、その利潤が人間性を犠牲にしたという認識をもっていた。したがって彼は、自分のココア工場の従業員を単なる産業機械の歯車ではなく、大産業における仲間—労働者とみなし、彼らの勤務条件は、彼らの自己啓発への欲求という最大で最良の価値を刺激するに足るものでなければならず、したがって労働者自身が持つ、最良・最善のものを発展させることを目標としていた。言い換えると、労働を可能な限り面白く、満足のあるものにする、をめざしていた。

革新的企業家として成功したラウントリーは、他方で慈善活動を展開したのみならず、同時にまた、貧困問題を科学的に分析し、その問題の背後に横たわる原因を探究し、社会改良「運動」に取り組んだのであった。そのやりかたは、当初は雇用主の『恩恵』といわれるものであり、それが J.R.Spirit を喚起した。<sup>(15)</sup> だが、企業規模の拡大によってパターナリズムの行使は不可能になるにつれ、他の方策を採用した。数千人を超えた従業員への情報提供、あるいは従業員同士の人間的な繋がりを維持する試みとして、1902年に企業内雑誌の Cocoa Works Magazine を創刊し、事業を成功に導くために、営利活動と社会進歩を結びつけること、そのために全従業員が共通の目標へ向かって努力する必要を強調した。この雑誌は、やがて従業員の社会活動（倶楽部や会合）や冠婚葬祭、昇進のみならず、文化活動（評論、写真、詩、パロディ等）の他、製造方法や作業工程に関するさまざまな改善、改良、合理化、品質向上、さらには従業員の福利厚生、労働条件等の改善についての提案を募るようになり、企業存続にとって重要な働きをするようになった。それは、今日、日本で Kaizen として知られているものを含んでいた。従業員による様々な提案——たとえば、商品の製造・包装・品質向上、作業の効率化、機械の改良、従業員の福祉など——を募集し、採用されたものに対して賞金が与えられた。こうした側面は彼が、革新的企業家として企業の飛躍を実現するとともに、企業家として従業員への福祉を図るという努力の証しであっ

た。

彼が考えた企業の社会政策の最前線での五つの条件は以下のようであった。  
1) 安楽な暮らしを可能とする合理的条件を維持するに十分な収入, 2) 無理のない労働時間とよき労働条件, 3) 労働している間と老齢になった時に相応した経済的な保障, 4) 20世紀の自由国家における人間に適した地位, 5) かれらが従事している産業の金融的繁栄に関わる分け前と包括的な計画——年金, 寡婦年金, 疾病・失業基金——が徐々に導入されること。(16)

このような考えにもとづいて彼は、様々な企業内福利や社会貢献活動をおこなった。たとえば、従業員の福利厚生に関していうと、1891年に従業員、特に若い女性従業員の諸々の相談や生活指導役としての welfare worker 制度を導入した。1904年には無料の薬と歯の治療施設を設けた。労働環境の改善に関しては、新工場の建設に際して、広さ、採光、換気、清潔さや環境に配慮した。

また、あらゆる人間の可能性と労働者の人間的成長を企図した社会人教育としての成人学級で、彼が21歳の時からほぼ40年間にわたって教え続けた。それにとどまらず、新工場では図書室の設置から始まり、企業内教育を就業時間内に、企業の負担で行なった。すなわち、1905年には女子対象の家庭学級、1907年には男子対象の鍛錬・数学などの学級をもうけた。さらに彼が1906年に創設した老齢年金・寡婦年金制度は、英国で最初の年金制度であった。1917年からは50歳以上の労働者と寡婦に与えられるようになった。

ラウントリーは教育に関して、愛国心のような初歩的な教育では不十分で、良き市民を育てるために、若者には単に、読み、書き、計算を教えるのみならず、また「何を」読み、書き、計算すべきかを教えなければならない。そして、その教育は全人格的なものであり、肉体と精神を含み、男女を問わず、英文学、歴史、社会政策へと導くものでなければならない、と考えていた。さらに、人間の人格形成に最も大きな影響力を有するのは教師であるという認識から、彼が理事として関わっていたブーザム・スクールやマウント・スクールでは、新式の設備を備えるほかに、よき教師を採用することに力をそそいだ。(17)

やがてラウントリーは、自分の工場やヨークの町をこえた事柄——いわゆ



る社会改良活動——に、再び関心を向け始めた。1892年のブース (Charles Booth 1840-1916) によるロンドンの調査 (Labour and life of the people in London) によって、住民の三割が極貧者であると報告されていた。この統計数値については疑問の向きもあろうが、多数の極貧者の存在については論ずるまでもなかった。かれらは酷しい肉体労働を維持するには不十分とされていたワークハウスと同じ水準の食事を家族に提供することすらできないでいた。貧困の14%をアルコールに起因するとしたブースの指摘をうけて、1897年ラウントリーは Arthur Sherwell と一緒に独自の調査を行ない、1899年には『禁酒問題と社会改良』を共著で出版し、建設的な禁酒政策を国に提起した。この本は9万部も売れた。(18)

生涯、禁酒立法連盟議長であった彼は、酔っ払いのだらしなさ、飲みすぎによる不健康を諫めたのみならず、収入に占める酒代の大きさが彼らの暮らしを貧しくしていると考えた。なぜなら、調査によると、貧しい労働者は、彼らの収入の6分の1をアルコールで消費していたからである。ラウントリーはこれが社会進歩の妨げになっている。なぜなら本来誰もが、自己を啓発して生き甲斐のある人生を過ごすべきであるのに、酒でうさをはらす生き方は、その道を自ら閉ざすものであると考えたからである。

ラウントリーはこの連鎖を断ち切ることをめざした。すなわち、酒類販売が安易な金儲けの手段となっているので、これを国の専売にすること。あるいは酒場をつい呑みすぎるのは、従業員が歩合給だから、自分の収入をあげるため、熱心に勧めるためだと考えた。そこで彼らの給料を固定給化することを提案した。さらにはパブに代わる娯楽施設として美術館、コンサート・ホール、禁酒カフェを推奨した。また、彼はアメリカの事例から全面禁酒は適当ではなく、北欧の事例から会社組織が良いと考えた。しかし、やがて彼はこうした対症療法では根本的な解決にならないと考えるようになる。つまり、労働者がパブへ出かけるのは、彼らの不快な住居のせいであることに気がついたのである。これを避けるには、スラム街をなくし、労働者がゆっくりとすごせる快適な住宅の建設が必要である。こうして彼はこの調査の過程を通して、労働者にとっての住宅問題に入り込むことになる。

ラウントリーによると、元来、ひとは社会的存在であり、社交を望む。し

かし、現状では、多くの労働者が『家族全体の食堂、洗濯場、居間、寝室、子供部屋、おそらくは仕事場でもある』一部屋で暮らしており、友人を招くなどということは不可能であった。<sup>(19)</sup> だからして彼らがしばしの安楽と歓談のために光輝くジン・ハウスや暖かいパブへ行くのも無理はない。加えてラウントリーは、工場労働が、『しばしば絶え間のない騒音、不快な熱、埃の充満した空気』の中で、極度の緊張と単調さに耐えねばならないものであることを熟知していた。パブはこうした状態から労働者を解放してくれる場所でもあったのである。したがってラウントリーにとって禁酒運動の解決策は、おおきく住宅（建設）問題、ヨリ根本的には貧困（の廃絶）問題に関わってくることになる。このようにして貧困と飲酒の悪循環を断ち切るには、よき住宅と環境の創出が必要という認識を持つようになり、彼の思考は、企業内の福利厚生問題から地域社会の改善・改良問題へと展開していった。

ラウントリーは1895-1905年に工場を移転させた後、1901年に隣接地 New Earswick の123エーカーを購入し、ガーデン・ビレッジの建設にとりかかった。当時の最先端の田園都市構想を参考にして、Unwin と Parker に依頼し「低収入の労働者に、緑に囲まれた庭付きの美しい質の良い小さな家を、低コストで供給する」コンセプトによる住宅づくりを目標とした。それはかつてのよき農場主が労働者に庭付きコテージを提供したり、ロバート・オーエン Robert Owen (1771-1858) がニューラナークで労働者用のコテージを建てたのとは違い、フィランソロピックな事業ではなく、当時の劣悪な住居への低コストによる挑戦であった。『外観は芸術的で、衛生的で、頑丈に建てられ、週約25シリングの収入のある人々』（それは最低賃金の労働者を意味した）が賃借可能な範囲で建設されるのを目標にした。<sup>(20)</sup>

1954年までに寝室三つを備えた500の家、一つまたは二つの寝室をもつ家が90あった。特筆すべきは、彼の工場の従業員に限定することなく、だれでも入居できる、肉体労働者と事務労働者の混合コミュニティを構想したことであり、コミュニティの運営は、村の住民による自主的な運営に任されるよう企図された。村のコミュニティ組織は非常に活発であり、大都市での地域社会の在り方についても、よきモデルとなった。<sup>(21)</sup>

#### 【4】三つのトラスト；社会改良と政策メーカーへ

ラウントリーの活動は、これにとどまらなかった。彼は事業でかせいだ資産の有効活用を念じ、1904年に三つのトラスト（信託）を創設した。本格的に貧困や社会の害悪を取り除くためである。トラスト創設にあたり彼は次のように語っている。「私は、多くの現在なされている慈善的な努力が社会的な害悪や困窮の、より表面的な現象の救済に向けられているが、他方で、そうした害悪や困窮の基礎をなす原因を調査するためには、わずかの努力しか向けられていない、と感じている。明らかな貧困や害悪について、それらを緩和するために必要な活動は、概してかなり適切に支持しようという感情を呼び起こす。たとえば、インドでの飢饉に襲われた人々のために基金を得ることは、飢えの原因の探求と比べると、はるかに容易いことである。また、ヨークにおけるスープ接待所（無料食堂）が適切な財政的支持を得るのは決して難しくはなかったが、貧困の範囲と原因の調査には、わずかの支持しか得られないであろう。」<sup>(22)</sup>

加えて、1905年に、長男 John が亡くなったことを機会に、家族に対し、人は大きな財産をもつことによって便宜さを得るが、同時に逆に安逸に陥る危険を指摘した。「今日の典型的な若者は、自分の安逸、安楽だけを考え、努力や自己犠牲なしで、欲しいものを何でも手にいれようとし、何の理想ももたない。親にとっては、お金があれば、子どもが欲しがれば、欲しがるだけ与えるのは容易いことだし、楽しくもある。だが、子どもにわがままの習慣を身につけさせることは、大人の責任として避けるべきである。個人的消費において、贅沢な習慣を身につけるのは容易いことであるが、贅沢は、しばしば富者を他の人々から遠ざける。その意味では、時として、富は恩恵よりも、むしろ災いをもたらすことがある。」そこでラウントリーは自分が生きている間に富を有意義に利用するため、『財産のほぼ半分を三つのトラストに寄贈』した。<sup>(23)</sup>

彼のこの言葉と行動の中に、貧困問題の解決に対する固い決意の表明と、こうした試みに対する当時の社会における評価の有り様が窺える。このトラストという組織の形成によって、社会改良活動は一段と強固なものへと高め

られた。彼が目差したのは、ごくありふれたチャリティのように、困窮者に基金を提供してお茶を濁すのではなく、端的に言えば貧困解消という特定の目的を持つ活動であり、まさに社会貢献から社会改良へという表現があてはまるものであった。彼はそれによってイングランド社会の様相が一変すると信じた。なぜなら、トラストは、政策メーカーとして、次々に社会改良への提案を行い、実行していくはずだから。

第一のものは、Joseph Rowntree Charitable Trust と呼ばれる、社会・チャリティ・宗教トラストであり、社会調査・成人教育・フレンド会活動への資金援助が主な仕事であった。その機能は、最初は、教育と貧困の原因調査に重きを置いていた。ほかには禁酒の促進、国際紛争における平和的解決、不規則な雇用の原因調査と救済策。いくつかの公園・グランド作りに援助が向けられた。教育に関しては、フレンド会のメンバー教育、成人学級、主に夜しか学習の機会のない男女のための教育法の制定、およびガーデンビレッジのコミュニティの要求に合致する教育の促進が企図され、また、クエーカー信仰に関連するパンフレットや雑誌の企画・出版・頒布が行われた。ことにラウントリーは、お金はないが、能力とやる気のある男女に適切な援助を図るべきだと考えていた。(24)

第二のものは、Joseph Rowntree Social Service Trust と称され、その目標・目的においては同じく社会トラストであった。しかし他の二つとは異なり、こちらは法的にはチャリティ組織ではなかった。英国におけるチャリティは、周知のようにチャリティ委員会（1853年設立）に認証された活動を言う。活動目的が、(1)貧困の救済、(2)宗教の振興、(3)教育の振興、(4)地域社会に対する利益をもたらすその他の活動をもつこと、とされている。もし認知されたら、税制上優遇措置が受けられる。

したがってチャリティ組織ではないことの意義は、政府や慈善団体によって資金提供を受けられない性格の活動への資金提供を目差したということである。つまり、時の支配勢力は依然として旧来のエスタブリッシュメントであり、彼らが政治的、文化的主導権を発揮していて、成り上がり者である中産階級の多くはジェントルマンをまねるスノビッシュであった。ラウントリーは敢えて新興の中産階級の立場を固守し、エスタブリッシュメントを批

判し、社会の変革を構想・実践した。ここにラウントリーの面目躍如たる点がある。

この段階のラウントリーがこだわったのは、自由主義的な政治活動であった。かれは帝国主義や軍国主義に反対する平和主義と自由主義の擁護者であり、自由党の支持者であった。ボーア戦争の際には、同じクエイカーのキャドベリーと歩調をあわせて新聞社を買とり、反軍国主義キャンペーンをくりひろげた。彼にとっては、単に戦争を非難し、社会争議を嘆くのとどまるのではなく、平和を生み出す活動に対してフリーハンドを持つことが、重要であったと思われる。なぜなら、この時期のラウントリーにとっては、『利己的で非良心的な富』の勢力が問題であった。彼らは新聞を通して世論に影響を与え、自らの目的だけを追求し、阿片取引、酒交易、南阿戦争を奨励していたからである。大衆に対する地方紙の影響力の大きさに注目したラウントリーは、このトラストが新聞に影響をおよぼし、もっと意義ある方向にむけて世論を変えることを望んだ。マスコミの影響力という意味で、もう一つは国内改革に敵対する勢力＝機構としての貴族院の批判があった。トラストは新聞社 Northern Echo の買収に始まり、やがて16の新聞社を併合してこれらの活動を展開した。

彼は、防衛や侵略の手段としての戦争や軍事力の使用について、市民が統制をしなければ、戦争は文明を破壊すると考えた。だから、彼は諸国民間の平和、国際法や秩序、様々な戦争回避策を支持した。第一次世界大戦の前にラウントリーは次の様に語った。「歴史を学ぶ者は、やがて社会進歩の最大の敵が軍国主義であることを知るであろう。軍国主義が優勢になれば、社会改良は止まってしまう。青年層の中に戦争への憎悪を植え付けること以上に、人類の進歩の原因となる大きな貢献はないであろう。」<sup>(25)</sup>

第三のものが、Joseph Rowntree Village Trust であった。これは先に述べたように、労働者がパブに浸る要因の一つである、貧弱な住宅問題を解決するためのもので、New Earswick 住宅村の建設と運営にあたるものである。上でみたように、労働者に低廉で良質な住宅を供給し、彼らの生活改善を図るものであった。これは彼が長年かかわってきた禁酒運動の延長線上に想定した社会改良の実行であり、それはまた彼の工場の従業員に限らず、彼

らを含む地域社会全体の生活、環境の改善を目指すものであった。先に見たように、それはフィランソロピックな試みではなく、ごく普通の労働者でも支払いのできる家賃で入居可能な、快適な住宅を提供するという事業であった。<sup>(26)</sup>

先に見たように、トラスト設立以前から彼が取り組んだ研究・調査には、禁酒と貧困問題がある。他にも、彼はいつくかの重要な社会問題の詳しい調査の必要を指摘し、それらはトラストの支援の下で実行された。また、しっかりしたトラスト設立のために、フレンド会活動の促進とともにトラスト活動を支援する意義を強調した。この点に関しては、ラウントリーはすでになくなっていたが、1930年にトラストの指導的立場の人物が、魂なき株式会社と良心なき地主を生み出すような微妙な影響から、どうやってトラストを守るかについて、また、社会を支えていく上におけるボランティア活動の意義について次のように述べていることを紹介しておこう。

『(a)個々人の主体性の掘り起こしと維持、(b)個々人の責任感の強化、(c)個性を延ばす、(d)法律によって与えられる社会的利益の公正な配分のみを受け取る、(e)社会における異なる階級の和解と真の社会進歩をもたらす社会改良、(f)正義感（同感としての）の創造と正義の評価の確保、(g)個性の精神的な源泉を強化すること』を挙げ、これらが、初期フレンド会の感情と精神に極めて近い社会奉仕活動の形態であり、当時の世代のクエイカー主義の予言的使命の一部を構成するものである、と述べている。<sup>(27)</sup>

三つのトラストは、第一のものは同じ名称で、第二のものは〈Joseph Rowntree Reform Trust〉に、第三のものは〈Joseph Rowntree Foundation〉にそれぞれ名称変更し、活動中である。重要なことは、これら三つのトラストの創設に込められた思想が、明確に英国社会の近未来に関する制度設計への展望、社会改良の政策提案を含むものであったということである。たとえば、Garden Village を建設するにあたり、彼は単に建物をつくるのではなく、その運営にあたる組織 Village Council をつくり、それが地域コミュニティの自主的な運営を行う、つまり、地域社会の活性化という視点がくみこまれていた。

## 【5】Rowntree の新自由主義思想

1919年、ラウントリーはトラストの評議委員会のメンバー宛に次のように書いた。その中に、われわれは、単文ながら、彼が捉えた英国社会の現状と社会改良への展望を見ることが出来る。

『まず、将来を見据える思想と方針が必要である。それは近い将来この国の労働者が行なうかもしれないあさはかな要求によってわれわれの忍耐が試されると思われるからである。わたしが精神的な同意をえようとしている提案は、以下の通りである。

①英国の現在の産業組織は、とりわけ以下のような理由により不健全である。

(a)それは産業戦争、婉曲に表現すれば競争に基づいている。

(b)それは国を階級に分断してきた——一方の側に資本の保有者、他方の側に労働者。彼らは異なる利害をもち、互いに大きく敵対している。

(c)多数の人々が、最低限必要な精神的、物理的能力を確保できないでいる、というシステムが機能してきた。

②現存システムの害悪を最小限にしようとしているわれわれのような企業は、当然、過渡的地位を占めており、そしてその社会進歩を助ける能力は、この過渡的地位を率直に認めることに大きく依存している。

③目標がとる正確な形がどうであれ、個々人が可能な最善の生活をえるために、自らのために、また、同様に他人のために、あらゆる面において完全な暮らしを確保すべく、誰もが振る舞うべきである。』<sup>(28)</sup>

この単文からラウントリーの考えをひきだす冒険をあえて試みると、まず、『この国の労働者が行なうかもしれないあさはかな要求』とは、おそらく当時盛んに行われたストライキ戦術や産業の国有化を含む社会主義的改革であろう。これに対するラウントリーの提案は、目下の産業組織の不健全さ、つまり、厳しい競争による労資の階級分断と貧困層の存在を認めた上で、富者と貧者への分断状態を、戦時の総動員体制や社会主義的計画経済ではなく、労使の参加する、ある種の産業民主主義体制へと変革することを想定していると考えられる。その意味で、目下の企業形態は何らかの過渡的形態であると

している。将来どのようなすがたになろうとも、自立的な個人を核として、一般的に社会の成員がみな、自分のためのみならず他人のために努力すること、つまり、自立と相互協力の必要性を想定している。

このラウントリーの社会改革思想を、例えばフリーデンの新自由主義の定義——自由・理性・進歩・個人主義・一般的善への関心・社交性・立憲的支配と制度的装置からなるセットで、それらの概念の結び付きがユニークさを持ち、相互に浸透・近接・優先して差違を生じ、様々な思想を演出する<sup>(29)</sup>——に照らしてみると、ラウントリーの思想の中にこれらの要素すべてを見ることができる。ラウントリーの特徴としては、社会問題の中心に貧困を置き、これをいかに廃絶するか、つまり社会を変革するかという問題関心で貫かれている点にある。その場合に、彼はすべてを国家の政策に収斂させるのではなく、エスタブリッシュメントを批判しながら、自らの企業内での福利厚生、つまり教育・年金・医療・welfare worker等を起点としつつ、地域社会に根差して、社会人教育、禁酒運動や住宅村の建設等を行なった。そして、時代が帝国建設へ向かう時に、平和主義に基づき、新聞を使った反帝国主義キャンペーンを行なったのである。<sup>(30)</sup>

産業的に成功した新興中産階級の多くの者がジェントルマンに迎合したのとは対照的に、ラウントリーは貴族院の廃止を主張するなど、一貫して旧来の特権階級を批判した。同時に、労働者階級の運動にも距離をおいていた。あくまで、各人の（潜在）能力の平等性を前提として、各人の自立＝人間的能力の開花を促した。企業内での若者教育においても、また、夜間の社会人学級においても、禁酒運動や住宅村建設においても、個人やコミュニティの自立と活性化を目標としていた。したがって、中産階級としての立場を固守しつつ、英国社会の改良＝新しい公共性の在り方、をめざしたといえる。その方向性は福祉国家政策に基礎を置いたラジカルな自由主義にあったといえるが、すべてを国家の政策に収斂させるのではなく、各人のボランティアな活動を引出すことに重点を置いていた。

かれが創設した三つのトラストは、企業のような収益活動を行うのが目的ではなく、ボランティアな組織による公益活動であり、とりわけその中の一つは、敢えてチャリティ組織になることを回避して、フリーハンドで活動を



行うものであった。それはチャリティやフィランソロピックな活動を超えた、社会の仕組みを変えるためのポリシー・メーカーとしての活動であった。ラウントリーは政府によって制度化、固定化、権利化されることを最終目標とするのではなく、地域社会に根を張って、絶えず各人の自立性、自発性を喚起し、そして各人が生き甲斐を感じる生き方を実現する仕組みを目指していた。こうしたボランタリーな組織と活動によって旧制度を打ち破る社会改良を構想したところに、ラウントリーが他の新自由主義者とはいささか異なる点を見ることができる。

#### 《注》

- (1) ジェントルマン支配に関しては、P.J.ケイン/A.G.ホプキンス（竹内幸雄・秋田茂訳）『ジェントルマン資本主義と大英帝国』岩波書店，1994。同（同訳）『ジェントルマン資本主義の帝国Ⅰ』名古屋大学出版会，1997。同（木畑洋一・且祐介訳）『ジェントルマン資本主義の帝国Ⅱ』名古屋大学出版会，1997。山本正編『ジェントルマンであること』刀水書房，2000および、W. D. Rubinstein, *BRITAIN'S CENTURY Apolitical and Social History 1815-1905*. 1998を参照。
- (2) 小関隆編『世紀転換期いざりすの人びと——アソシエーションとシティズンシップ』人文書院，2000。では、任意団体の定義を次のように行っている（同11頁参照）。；任意団体とは、国家や公的権力機関から独立した民間団体であり、外部の援助を仰ぐことはあるにしても、基本的にセルフ・メイドの組織であること。明確な目的を掲げ、多くの場合明文化された規約に基づいて運営されること。メンバーシップを限定し、規約に定められた手続きをへてメンバーが承認されること。それに加わることが要求するコミットメントがごく限定的であること、および組織の柔軟性。ちなみに、ラウントリーのトラストは、社会におけるポリシー・メーカーとして先導的役割を果たした。この時代の中産階級の意識に関しては、松浦高嶺『イギリス現代史』山川出版社，1992. 107-9頁参照。階級社会の推移に関しては、Edward Royle, *Modern Britain*. 1997. pp.82-161を参照。
- (3) G.M.Trevelian, *The English Social History*. (first 1942). (松浦・今井訳)『イギリス社会史2』みすず書房，1983。の17章，18章を参照せよ。リチャード・オールティック，要田圭治他訳『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房鶴見書店の第二章ヴィクトリア朝の人々，特に「工場とスラム」の項，同書44-58頁を参照。Cf. Peter Mathias, *The First Industrial Nation*. 2001 (first 1983). pp.166-202.
- (4) 村岡健次・木畑洋一『イギリス近代史3 近現代』山川出版社，1991. 115-6頁参照。E. Royle, *op. cit.*, pp.185-189. この時代より前のチャリティに関しては，Gareth

Jones, *History of the Law of Charity 1532-1827*. 1969を参照。

(5) この時代における他の実業家達については、山本通『近代英国クエイカー実業家たちの世界』特に第五章149-200頁、および David B.Windsor, *The Quaker Enterprise*, 1980., David H. Pratt, *English Quakers and the first industrial revolution*. 1985. を参照。特に、同じクエイカーのキャドベリー一族は、社会改良活動や反帝国主義キャンペーンに関してもラウントリー一族と協調することが多かった。彼らは、エスタブリッシュメント批判についても、また、トラスト設立についても、共通点を多く持っている。キャドベリーについては、さしあたり次のものを参照。A.G.Gardiner, *Life of George Cadbury*. 1923.

(6) ラウントリーは1869年、彼が33歳の時に従業員12名のチョコレート製造工場の経営に参加した。83年に弟ヘンリ Henry I. Rowntree (1838-1883) が死去した後は、彼が経営の全責任をもった。時機をみはからって新技術を導入し、80年代の末には企業としての成功をもたらした。その後は比較的順調に推移し、工場が手狭になったこともあり、90年に郊外に土地を購入、95年より新工場へ移転を開始した。97年には有限会社に転換し、名前を H.I.Rowntree & Co.から Rowntree & Co.Ltd.に変えた。ラウントリーは取締役会の議長、息子のウイルヘルムとシーボーム、甥のアーノルドとフランク、そしてアーノルドの弟テオドルが秘書となった。したがってこの段階では、依然として極めて家族的な事業であったが、従業員も1000名を超えた。その後、1902年には2000人、06年には4000人、09年には4000人、24年には約7000人を数えた。彼が長年あたためてきた考えを実行に移すのは、企業が成功をおさめ、晩年大きな資産を手にした1890年代以降である。

ラウントリーの伝記は、Anne Vernon, *A Quaker Business Man*. 1987 (1958). および Luther Worsteinholm, *Joseph Rowntree (1836-1925) A Typescript Memoir*. (hrsg.by S.Burkman,1986). を参照。なお、この時代の新自由主義の性格に関しては、さしあたり、Peter Clarke, *Liberals and Social Democrats*, 1978. および Alan Sykes, *The Rise and Fall of British Liberalism 1776-1988*. 1997を参照。

(7) フォックスに関してはさしあたり以下を参照；H.Larry Ingle, *First among friends: George Fox and the creation of quakerism*. 1994., Douglas V.Steere, *Quaker spirituality: selected writings*. 1984., ルイス・ベンスン (小泉文子訳) 『クエイカー信仰の本質：創始者ジョージ・フォックスのメッセージ』 教文館, 1994.

(8) cf.Stephen Allott, *John Wilhelm Rowntree*. 1994.

(9) Anne Vernon, *op.cit.*, p.29. 45年9月から49年5月まで、47年を除いて疫病はジャガイモの凶作をもたらした。種芋まで食べ尽くし、一層の減収をもたらすという悪循環であった。他方、穀類には影響がでなかったため、アイルランドからイングランドへ輸出された。生活に窮していた人々は、輸出阻止のための暴動を起こした。あわてた政府はアメリカから10万ポンド (金額) の乾燥トウモロコシ緊急輸入、46年の穀物

法撤廃、46年からの公共事業による難民雇用、47年無料スープ提供所設置、などを試みた。国勢調査によると、1841年の人口は817万人、51年は655万人であった。したがってこの大飢饉で162万人が減少したことになる。内、100万人が死亡、残りが北アメリカなどへ移民したと推定される。貧困問題へのラウントリーの関心の礎は、このアイルランド飢饉であった。ジャガイモ飢饉に関しては、川北稔編『イギリス史』山川出版社、1998。444頁参照。

- (10) Anne Vernon, *op.cit.*, p.61
- (11) Ibid. この数字を、H.Perkin のそれとを比較すると興味深い。パーキンの上流階級と中流階級を合わせたものが、ラウントリーの上流階級と富者にあたる。村岡・木畑、前掲書124頁。
- (12) Anne Vernon, *op.cit.*, p.64
- (13) ラウントリー自身がどの程度関わっていたかは不明だが、1918年の年会で採択され、今日までひきつがれてきている『本当の社会秩序の基礎』という八項目からなる資料をあげておく。1) イエス・キリストによって明らかにされたように、神がわれわれの父であるということは、当然われわれを、人種や性別や社会層の制限のない兄弟愛に導くのである。2) この兄弟愛は、すべての物質的な目的を越えて、神と人間に本当にかかわる人格の成長を導くような社会秩序の中で、表現されるべきである。3) 肉体的、道徳的ならびに精神的な完全な発展の機会が、社会のすべての成員に、男にも女にも子供にも、与えられることが保証されねばならない。人間の全人格の発展は、不公平な諸条件によって妨げられねばならず、また、経済的な重い負担によって潰されてはしまうべきではない。4) われわれは、物質的な事柄と因習から解放される生き方を追求すべきである。われわれは、人と人との間にいかなる障壁をも設けないような生き方、過度な要求を満たすために誰かに過重な重荷を負わせたりすることがけっしてないような生き方、を追求すべきである。5) 正義と親愛と信頼の精神的な力は、それがあらゆる人々の心の中の最良のものに訴えるからこそ、力強い。また、それを労使関係に適用すれば、偉大な事業が達成できるのである。6) 外からの支配を行使したり、武力に訴えるという方法を、われわれは、国際間の事柄についてだけではなく、労務管理の全部の問題についても拒否する。対立を通してではなく、協力と善意を通してこそ、お互いにとっても全体にとっても、最良の結果が得られるのである。7) お互いの奉仕は、その上に生活が組み立てられる原則なのである。私的な利益ではなく、奉仕こそが、すべての仕事の動機であるべきである。8) 土地とか資本とかの物質的事物の所有権は、人間の必要と発展にもっともよく貢献するよう規制されるべきである。以上 Alastair Heron, *The British Quakers 1647-1997*. 1997. pp.22-3. および山本通『近代英国クエイカー実業家たちの世界』におけるクエイカー雇用会議の分析、特に第七章を参照。
- (14) もちろん、シーボームの業績も多彩である。さしあたり、Asa Briggs, *Social*

*Thought and Social Action: a study of the work of Seebohm Rowntree 1871-1954.* 1974. および Jonathan Bradshaw, Preface in; *B. Seebohm Rowntree's POVERTY.* (new edi.2000) を参照せよ。なお、シーボームが行った1899年と1936年の調査の評価の違いについては、Rubinsteinの研究 (*York: Poverty and Progress, 1899-1936.* in; *York History*, 1975.) が興味深い。また、生活スタイルからみても、ラウントリーの方がシーボームよりも遥かに簡素であり、エスタブリッシュメントに対する批判意識も強かった。

- (15) J. R. Spirit は、ラウントリーの傍にいた人びとの間では周知のもので、企業全体の産業政策が依拠する基本であった。それは人びとに対し、忠実にまた仲良く働く力を与えるもので、労使双方の根本的な人間的要求——労働者同士のよき人間関係、人格や能力の表出と発展、同じ目標へ向かって最大限努力し、協力するという欲求——を満たすものであった。Cf. Paul H. Emden, *Quakers in Commerce. 1939.* p.209 こうした政策は、労資の階級対立の観点からは、経営者による労働者の懐柔策と見なされる。むしろ、経営者は労働者を全国型組合から引き離す意図をもっていた。こうした工場文化を形成するような場合は、労働者ではなく、経営者（中産階級）に主導権があったといえよう。いわゆる産業民主主義の先駆的形態といえよう。Cf., V. M. Clarke, *New Times, New Methods, and New Men.*
- (16) David. B. Windsor, *The Quaker Enterprise.* 1980. pp142-3. および Paul H. Emden, *Quakers in Commerce. 1939.* p.209. 参照。これらの福利厚生・年金・労働条件の改善といった政策は『19世紀英吉利の個人企業や家族企業の雇用主たちによって、綿紡績業をはじめとして、多くの企業で広く実施されていた。中略。雇用主たちは、疾病、怪我、老齢、失業などに対する労働者たちの不安をとり除くことによって、彼ら（とくに熟練労働者）の忠誠心を勝ちえるため、あるいはまた、娯楽・教育施設を提供することによって労働者の質を高めるために、福祉政策を採用した。』（山本通239-240）したがって、ラウントリーに固有な政策という訳ではなかった。
- (17) *Joseph Rowntree 1836-1925, "Sixty Years After".* in; *Quaker Prophets*, edi. by G. Newman. 1946. p.12.
- (18) "The temperance problem and social reform." Anne Vernon, op.cit., p.133
- (19) Anne Vernon, op. cit., p.137
- (20) Lewis E. Waddilove, *One Man's Vision.*
- (21) Anne Vernon, op. cit., pp.147-9. できあがった住宅は、1エーカーあたり12戸を超えず、各戸は2本の果樹つき庭をもち、南向きのリビング・ルームが備わっていた。庭は野菜を育てることが可能で、かつ洗濯物を干せる広さ、子供の遊び場にもなるものであった。標準で、寝室3、居間・台所・客間+石炭貯蔵室をもっていた。境界には植樹がなされた。トラスト成立以前の3年間で、30の家が建てられ、週約5シリングで貸し出された。トラスト成立後は、費用計算に基づき、理想からすると若干の後

退を余儀なくされたが、135ポンドで建てられ、当時の利率3.5%から、週4シリング6ペンスで賃貸された。以降、混合コミュニティー——収入や家族構成の違うひとびとが住むこと——を念頭において、様々なタイプの家が建てられた。これが45年ののちローカルカウンシルによって建てられることになる家のモデルとなったことは周知の事実である。村には、その後様々な公共施設（ホール、病院、学校、図書館、体育館、プールなど）の建設・寄贈がなされた。詳しくは L. E. Waddilove, *One Man's Vision*. 1954. を参照。

- (22) “Joseph Rowntree”, in; I. C. Bradley, *Enlightened Entrepreneurs*. 1987. p.50.
- (23) Anne Vernon, *op. cit.*, p.153
- (24) *Ibid.*, p.210.
- (25) *Joseph Rowntree 1836-1925, “Sixty Years After”*. in; *Quaker Prophets*, ed. by G. Newman. 1946. p.11. これら二つのトラストについては、ラウントリーは発足時、35年もすればその使命が終了するものと考えていた。Gilliam Wagner, *The Chocolate Conscience*. 1987.
- (26) Anne Vernon, *op. cit.*, p154. なお、この第三のものは、ほかの二つとは違い、永続性のあるものと想定されていた。
- (27) Luther Worsteinholm, *op. cit.*,K7..
- (28) 1919年4月24日付けのジョーゼフのメモ
- (29) Michael Freedon, *The New Liberalism An Ideology of Social Reform*, 1978.
- (30) また、旧来の支配に対する批判、特に、帝国主義的な政策；国際的な領土分割や麻薬取引、酒類貿易、そして南阿戦争への加担；を大衆新聞を通しておこなった。それが可能となった背景には、1870年の教育法が普通の人びとに読み、書きを可能としたということがある。Social Service Trust が、Westminster Press Provincial Newspapers Limited を梃子として十六を下らない新聞社を支配しつづけた。